

本の万華鏡

『東区 榎木町界隈』

西尾典祐著

健友館 二〇〇三年

推薦者 井口 貢 (いぐち・みつぐ)

京都橋大学文化政策学部教授、専門分野は文化経済学。著書は、『文化経済学の視座と地域再創造の諸相』(学文社、一九九八年)、『文化現象としての経済』(学術図書出版社、一九九五年)、『文明と文化の視角―進歩社会の文化経済学』(東海大学出版会、一九九九年)、『観光文化の振興と地域社会』(ミネルヴァ書房、二〇〇二年)、『観光文化論』(共著、ミネルヴァ書房、二〇〇四年)、『まちづくり・観光と地域文化の創造』(学文社、二〇〇五年)など。

「観光都市」と「都市観光」。この二つの概念の間に横たわる差異を認識することから、都市を巡るオルタナティブな旅の考察が始まるのではないだろうか。また観光立国を目指すわが国にとっても、この両者を峻別することは必要不可欠な作業である。

周知のように、「観光」という言葉の源は、「国の光を観る」(『易経』)とにある。地域やまちのかけがえのない文化や、それを守り継承してきた(している)人々を光と捉え、その代替不可能な価値を十二分に認識し、来訪者に対しては矜持をもってそれを示し、また来訪者は、心を込めて地域の宝物を眺めて何かを学びとる。そして、そこから始まる知的交流こそが観光の本義であり、醍醐味でもある。たとえ多くの人が、「観光都市」と呼ぶことのないまちでも、人々が永きにわたってそこに住まい積み重ねてきた生活文化や暮らしの記憶は必ず存在している。それこそがそのまちの「観光素材」であり、そのまちでしか味わうことのできない「都市観光」を演出するのである。「素材」を、あたかも「うち上げる」ような安易な手法で「観光都市」をもくろむ方途は、多くの場合、地域社会に真の幸福をもたらすことにはない。

幕の閉じた「愛・地球博」とともに、昨年は一大「名古屋ブーム」の年でもあった。しかし、このブームは一朝一夕で起きたものではない。確かに、誰も名古屋を観光都市と呼んではこなかったかもしれないが、尾張徳川藩の自由な藩風が育んだモノづくり(からくり人形に象徴されている)の伝統は、結果として東京にも大阪にも、そして京都にもない独特の都市文化を形成してきた。

本書は、一九八五年に「歴史的町並み保存地区」に指定された名古屋市中区白壁・主税・榎木町で、明治・大正・昭和初期に紡ぎだされた都市の記憶をたどる労作であり、奇しくもこの地区では豊田佐吉や喜一郎、福沢桃助や川上貞奴、盛田昭夫らが居を構えていた。名古屋圏が力を入れている産業観光の伏流水ともいえる都市観光とまち歩きを、巧まずして教えてくれる隠れた名著といえよう。



from editor's room

CEL編集部が推薦する参考図書

『観光人類学』山下晋司 新曜社 (1996年)  
 『エコミュージアムへの旅』大原一興 鹿島出版会 (1999年)  
 『エコミュージアム 21世紀の地域おこし』小松光一 家の光協会 (1999年)  
 『歩いてみつけたイタリア都市のパロック感覚』陣内秀信 小学館 (2000年)  
 『新しい観光と地域社会』石原照敏、吉兼秀夫、安福恵美子 古今書院 (2000年)  
 『観光学入門 - ポスト・マス・ツーリズムの観光学』岡本伸之 編 有斐閣アルマ (2001年)  
 『観光文化の振興と地域社会』井口 貢 ミネルヴァ書房 (2002年)  
 『集客都市 - 文化の「仕掛け」が人を呼ぶ』橋爪節也 日本経済新聞社 (2002年)  
 『グリーンホリデーの時代』佐藤 誠 岩波書店 (2002年)  
 『新たな観光まちづくりの挑戦』観光まちづくり研究会編、国土交通省総合政策局観光部 ぎょうせい (2002年)

『天神さんの商店街 - 街いかし人いかし』土居年樹 東方出版 (2002年)  
 『都市観光でまちづくり』都市観光でまちづくり編集委員会編、都市観光を創る会監修 学芸出版社 (2003年)  
 『現代観光へのアプローチ』山上徹、堀野正人編著 白桃書房 (2003年)  
 『アーバンツーリズム - 都市観光論』淡野明彦 古今書院 (2004年)  
 『エコロジーと歴史にもとづく地域デザイン』法政大学大学院エコ地域デザイン研究所、陣内秀信 学芸出版社 (2004年)  
 『グリーン・ツーリズム実践の社会学』青木辰司 丸善 (2004年)  
 『まちづくり・観光と地域文化の創造』井口 貢 学文社 (2005年)  
 『モダン道頓堀探検 - 大正、昭和初期の大大阪を歩く』橋爪節也 創元社 (2005年)  
 『モダン心齋橋コレクション - メトロポリスの時代と記憶』橋爪節也 国書刊行会 (2005年)  
 『都市観光行政論』中尾 清 たいせい (2005年)